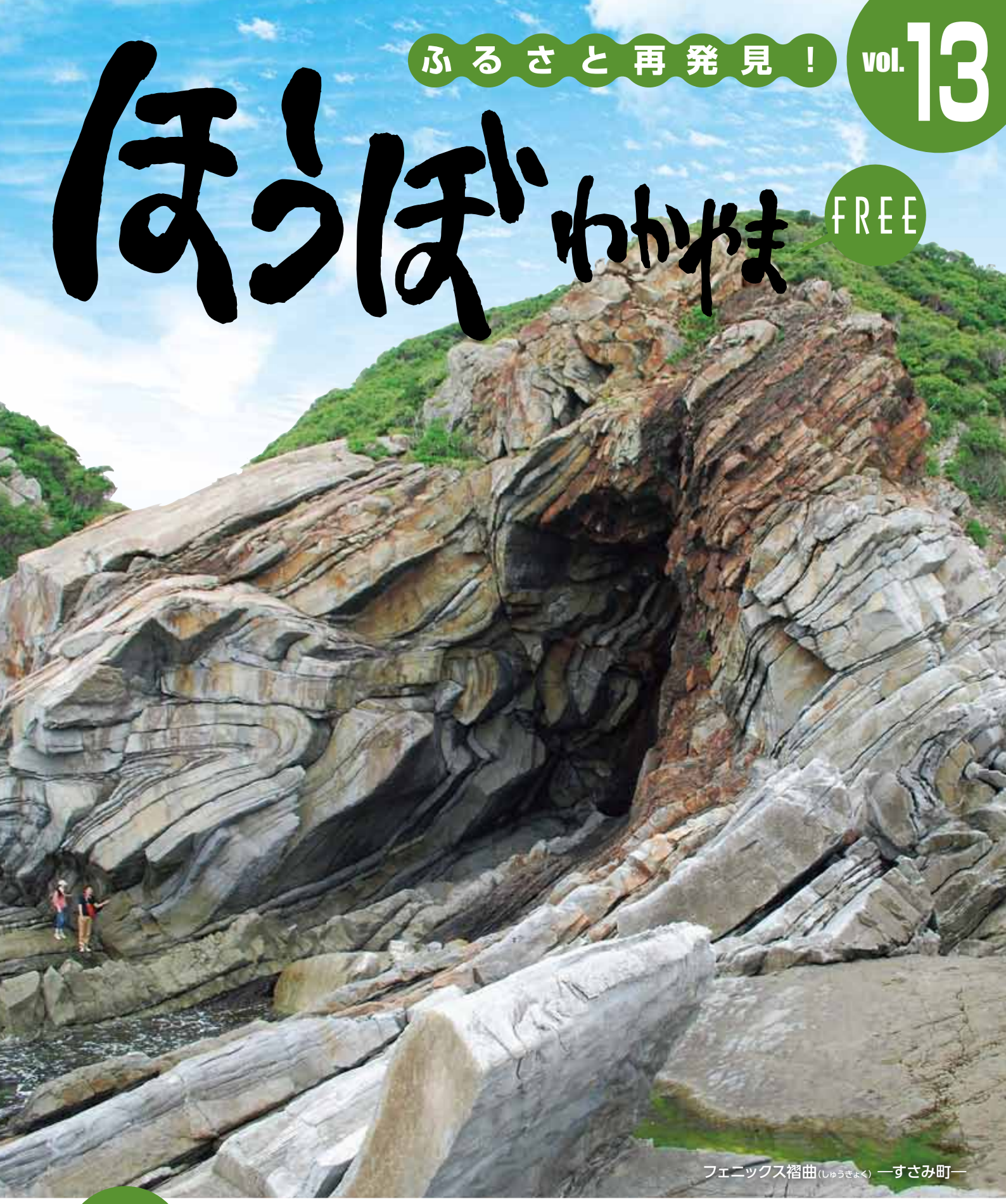
ふるさと再発見！ VOL.13

ほうぼう わかやま

FREE



フェニックス褶曲（しゅうきょく） ―すさみ町―

巻頭特集

大地の歴史 南紀熊野ジオパーク構想

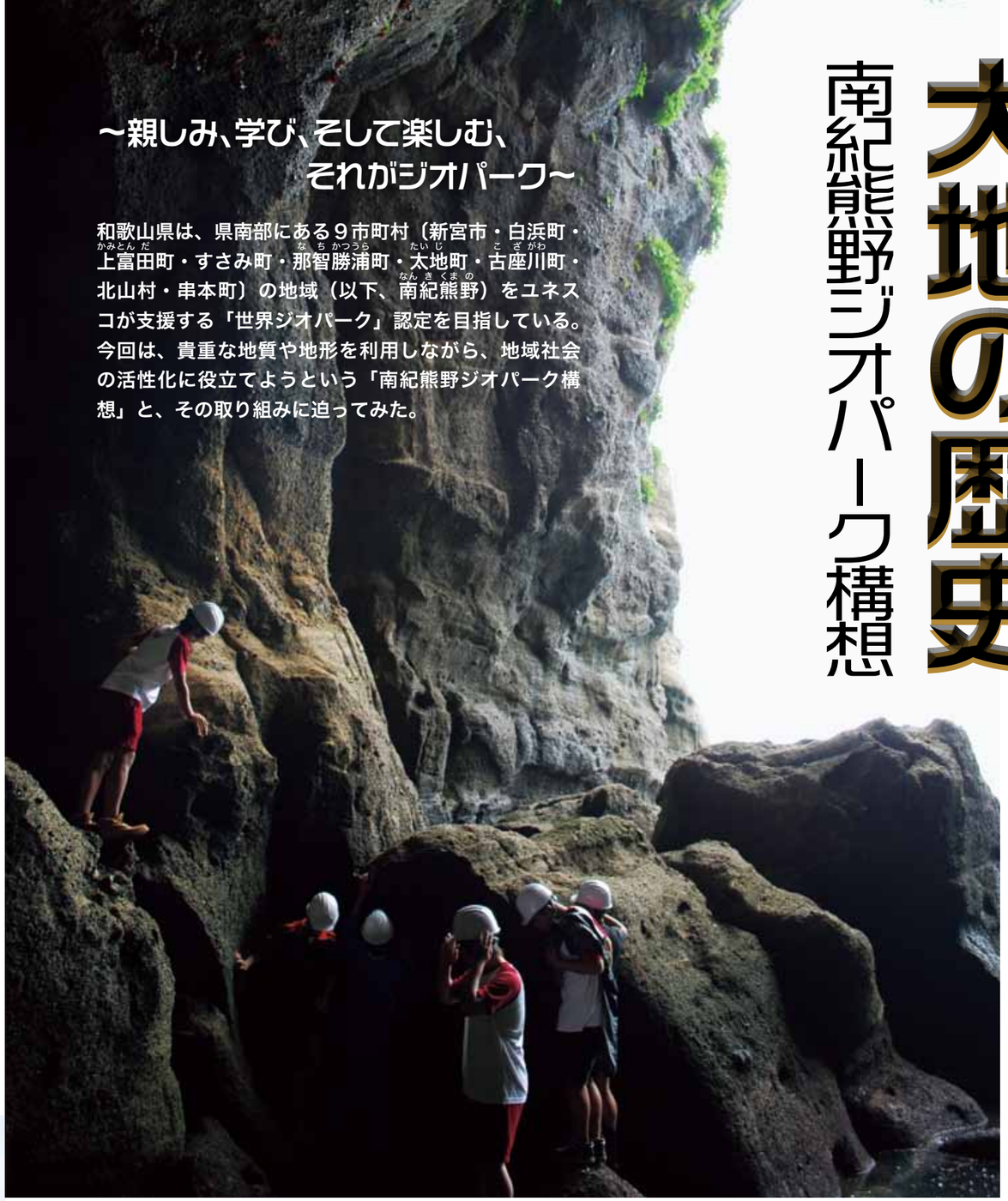
歴史・文化
散策
想いをカタチに＋施設紹介
I♥WAKAYAMA 私の和歌山

南海道 万葉びとが歩いた道
梧陵の偉大な足跡をたどる ―広川町―
句集『ななくさ』坂本康雄さん／戸津井鍾乳洞
マイブーム「御朱印集め」

大地の歴史
南紀熊野ジオパーク構想

～親しみ、学び、そして楽しむ、それがジオパーク～

和歌山県は、県南部にある９市町村（新宮市・白浜町・上富田町・すさみ町・那智勝浦町・太地町・古座川町・北山村・串本町）の地域（以下、南紀熊野）をユネスコが支援する「世界ジオパーク」認定を目指している。今回は、貴重な地質や地形を利用しながら、地域社会の活性化に役立てようという「南紀熊野ジオパーク構想」と、その取り組みに迫ってみた。



南紀熊野ジオパーク構想

海岸線から海へ向かって大小の奇石が一列に並ぶ「橋杭岩」、古来より人々の信仰の対象とされた「那智の滝」など南紀熊野には多彩な表情を持つ自然景観が多くある。

南紀熊野ジオパーク構想は、学術的に貴重な地質や地形だけでなく、そこから育まれた生態系や、歴史・文化、食などを通じて「地域の宝」を見つめ直し、教育や観光に活用して、地域の活性化につなげようという取り組み。

昨年2月に南紀熊野ジオパーク推進協議会が設立され、2014年の日本ジオパーク認定およびその後の世界ジオパーク認定をめざし活動している。今年3月下旬には日本ジオパーク委員会に申請書を提出し、4月30日の公開プレゼンを経て、7月に現地審査などが行われた。8月28日には認定されるかどうかが発表される見込みだ。

そもそもジオパークとは

ギリシャ語で地球・大地を意味する〝ジオ（GEO）〟と公園の〝パーク（PARK）〟を組み合わせた言葉で、いわば〝大地の公園〟。

日本国内では33地域が日本ジオパークに認定されており、うち6地域が世界ジオパーク（全世界29ヵ国、１００地域）に認定されている。

世界認定にはまず国内認定が必要で、和歌山県を含めた17地域が日本ジオパークをめざして活動している。（２０１４年6月現在）

地球の営みが造りだす景観だけでなく、その大地がもたらす豊かな生態系や、そこで暮らす人々が築いた文化や産業との関わりを学び、触れ親しみ、そして楽しむ。大地の上に成り立つすべてのものを丸ごと楽しむテーマパーク、それがジオパークだ。

山・川・海の魅力いっぱい 南紀熊野のジオサイト

ジオパーク内での見どころを「ジオサイト」という。景観や地質に限らず、ジオパークを特色づける見学場所や施設、動植物や歴史・文化的価値のあるものなども含む。南紀熊野では 102ヵ所ある。

（2014 年 4 月現在）

ジオパークと世界遺産の違い

いわゆる世界遺産はユネスコの正式プログラムで、人類の遺産の「保護」を主目的としている。これに対しジオパークは、ユネスコが支援する「世界ジオパークネットワーク」が推進する活動で、「保護と活用」を主目的としている。教育や科学の普及、地域振興への活用などで〝持続可能な地域の発展〟を実現する取り組みだ。保全と同時に地域の人々の活動そのものが重視される。

また、4年おきに再審査で見直しが行われることも世界遺産と異なる点であり、認定までの道のりも大変だが、認定後も油断ができない。

持続可能な地域の発展を実現するために

南紀熊野ジオパーク構想では、貴重な地質や地形をはじめとした地域資源を保全するだけでなく、教育や観光・産業に活用することで、地域の活性化につなげる様々な活動が行われている。

守ろう
- 地質や地形などの保護・保全と啓発
- ボランティアによる地域清掃活動

知ろう
- 小学校など学校施設への出前授業や野外学習の実施
- 大学や関係団体と連携した研究・調査および教育活動
- 市民の意識開発・普及活動（セミナーや講演会、シンポジウムなど）
- 体験学習会の開催　• 防災教育

保全　教育
持続可能な地域の発展をめざす
観光　地域活性

楽しもう
- ジオパークガイドの養成
- ジオツアーの実施
  （観察会や見学会、ウォークイベント、フィールドワーク、体験ツアーなど）
- 交流人口の拡大

盛り上がろう
- パネル展などの実施
- フェスタなどイベントの開催
- ジオフードなど商品開発
- 地域内および世代間の交流(人のネットワーク)

ジオパークで地域をもっともっと元気にしていこう!!

今後のスケジュール

めざせ! 南紀熊野ジオパーク

今後、南紀熊野ジオパークガイド養成講座や、
ジオツアー、ジオパークフォトコンテストを実施予定です。
詳しくは、南紀熊野ジオパーク推進協議会公式ホームページへ。
http://www.nankikumanogeo.jp

取材協力・写真提供：南紀熊野ジオパーク推進協議会事務局（和歌山県自然環境室）　TEL 073-441-2780

ダイナミックな“ジオ”を体験

南紀熊野は、海洋プレートの沈み込みによって形成された「付加体」、その上に積もった「前弧海盆堆積体」、それらを貫いて噴出した「火成岩体」という日本列島を形成する3つの地質が揃って見られる。それらが森林や漁場や霊場に恵まれた熊野の風土の背景になっているのが、最大の見どころである。

今回見学できたのは、串本町にあるジオサイトの橋杭岩と九龍島。

橋杭岩は、約1500万年前に地下でマグマが冷え固まってできた岩が、風化して立岩が並ぶ奇観となった。古くから名勝として観光に活用されており、弘法大師にまつわる伝説も残されている。最近になって橋杭岩周辺に散らばる巨石が過去の大津波に流されたものであると判明し、地震研究からも注目されている。渡船で行く九龍島は、隣接の鯛島とともに「九龍島礫岩層」と呼ばれる独特の地質の島だ。九龍島には海賊伝説の元になった波によって浸食された海食洞が多く、中には生き物の殻が溶けて鍾乳石のようになったものが見られる。ヘルメットをかぶり洞穴を探検すればダイナミックな“ジオ”を感じることができ、大自然が時間をかけてつくりだした非日常的な風景に感動する。

※ジオサイトの見学はガイドの指示のもと行っています。

神保 圭志 氏
同志社大学卒
熊野古道大辺路刈り開き隊副代表
串本町文化財保護審議委員

今回お世話になった南紀熊野ジオパークガイドの神保氏は、「認知度は広がってきていると思われるが、地域振興に活用しようという認識がまだ希薄です。地域の人に知っていただき、新しい価値を発見する“あるもの探し体験”やジオサイトを活用したウォークイベントの開催などにより、新たなビジネスチャンスにもつながる地域活性化が今後の活動として重要と考えます」と話された。

観光資源としては十分に魅力を感じる“南紀熊野ジオパーク構想”。認定されるのが今から楽しみである。

●お問い合せ：「南紀熊野ジオパークガイドの会事務局」（和歌山県自然環境室内　TEL 073-441-2780）

南海道

—万葉びとが歩いた道—

今から1200年以上の昔、都がまだ大和国にあった万葉の時代、紀伊国の和歌の浦[注①]や牟婁の湯[注②]は都人の憧れの地だった。そして彼の地を目指す旅人の多くは、古代の官道「南海道」を利用したと考えられる。万葉びとが歩いた南海道の周辺には、今でも古代のロマンが溢れている。

古代の官道

南海道とはもともと古代の行政区画の名称で、紀伊国と四国の国々などが含まれる。古代日本の行政区画は大和国を中心とする畿内と、南海道など七道に分割されていた。道路としての南海道は、都と七道の国々を結ぶため、国家が運営した道のひとつで、今でいう国道にあたる。

南海道の道筋については諸説あるが、『延喜式』[注③]等の記述から推定すると、和歌山県内では紀ノ川の北岸を通り、和歌山市の加太までが陸路。その後、船で淡路島へ渡るルートだったようだ。

万葉歌と南海道

では、南海道を歩いた都人は旅の途上、どのような景観を目にしたのだろうか。「万葉集」[注④]にはその道々で歌われた歌が収められている。紀伊国の玄関口は、現在の和歌山県と奈良県の境にある真土(まつち)山(やま)。異国へと足を踏み入れるこの地は都人の郷愁を誘ったようで、8首の歌が残されている。山裾を流れる落合川には古代の渡し場(飛び越え石)とされる渡し場があり、いにしえの面影を今に伝える。

飛び越え石

万葉びとの心を特にひきつけた南海道の名所は、現在のかつらぎ町にある妹山(いもやま)・背(せ)山(やま)だ。ひきつけた理由はその名称。万葉時代の「妹(いも)」は妻や恋人（女性）、「背」は夫や恋人（男性）に親しみを込めて呼びかける語である。夫婦のように寄り添う妹山・背山の姿に、万葉びとは都に残してきた妻や恋人の姿を思い浮かべたのだろう。ここでは15首もの歌が残され、これは万葉集に登場する山のなかでは第2位である。

このほか、橋本市の妻、東、市脇、和歌山市の加太などで詠まれた歌も残っている。実際にその場での歌が残されていなくても、万葉集の時代に複数回あった和歌の浦や牟婁(むろ)の湯への行幸[注⑤]では、公の旅であるだけに、南海道を利用した可能性が高い。聖武天皇[注⑥]の玉津島[注⑦]行幸に従駕(じゅうが)し、有名な「若の浦に―」の歌を残した山部赤人[注⑧]も、その旅の途上には南海道で歌を詠んだかもしれない。

南海道を歩けば、その景観や歌の記憶がさまざまな想像を呼び起こし、訪れた人を万葉の昔にいざなうだろう。

妹山・背山

注①和歌の浦…和歌山市の景勝地で玉津島神社などがある。『万葉集』にも詠まれた歌の聖地。
注②牟婁の湯（むろのゆ）…白浜町の温泉。古くから多くの宮人が訪れたとされる。
注③延喜式（えんぎしき）…平安時代中期に編纂された法令書。藤原時平・忠平が編纂した。
注④万葉集…7 世紀後半から 8 世紀後半ころにかけて編まれた日本最古の歌集。
注⑤行幸（ぎょうこう・みゆき）…天皇が外出すること。
注⑥聖武天皇…奈良時代の天皇。東大寺大仏を建立し、墾田永年私財法を制定した。
注⑦玉津島…和歌の浦にあった島（現在は陸続き）。玉津島神社が鎮座する。
注⑧山部赤人（やまべのあかひと）…奈良時代の歌人で三十六歌仙の一人。叙景歌で知られ、歌聖と呼ばれた。玉津島行幸の従駕歌「若の浦に潮満ち来れば潟をなみ葦辺をさして鶴鳴き渡る」が有名。

歴史のロマン感じてほしい

長谷 正紀 氏
関西大学非常勤講師

南海道をめぐってはさまざまな学説があり、その正確な道筋もまだ確定されていません。でもその分、あれこれと想像を巡らせることができる研究課題です。

古代の南海道は、最大で道幅 12 mほどの大道だったようです。その大道を、古代には多くの皇族が白浜温泉や和歌浦を目指し、通行しました。南海道に沿った脇道や、紀ノ川の水運等も利用した人は多いと思いますが、紀伊国と都をつなぐ天下の大道だったことは間違いありません。

南海道の推定ルートを実際に歩いてみると、想像以上に紀ノ川の近くを通っていることがわかります。これはやはり、古代の旅人にとって水場が非常に重要だったということでしょう。実際に歩くことで見えてくることはたくさんあります。

和歌山には多くの貴重な歴史遺産がありますが、そのひとつとして、和歌山の人にはぜひ南海道を知ってもらいたいと思っています。そして、できれば実際に歩いてもらいたい。そうすることで、悠久の歴史のロマンを肌で感じてほしいですね。

万葉歌とたどる南海道

真土山

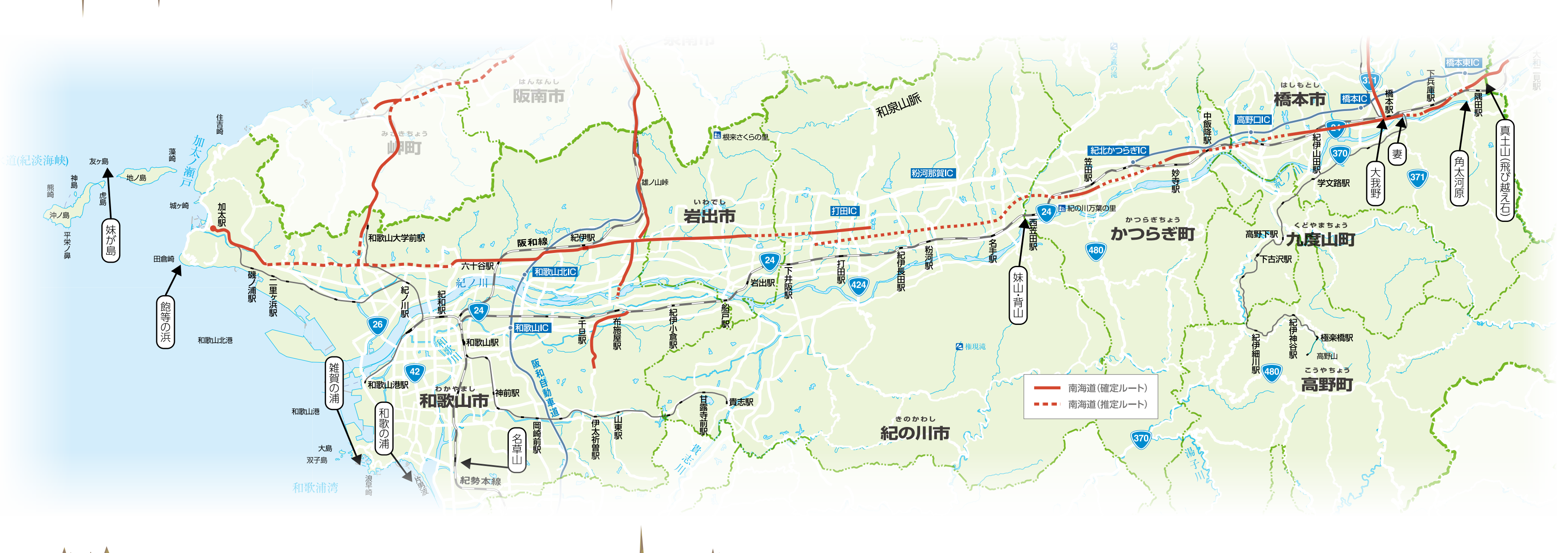
白たへににほふ真土の山川に我が馬なづむ家恋ふらしも（巻七・一一九二）

白い布のように真っ白に照り映える真土、その真土の山を流れる川に、私の乗った馬が行きなずんでいる。家の者が私のことを思っているらしい。

大我野

大和には聞こえ行かぬか大我野の竹葉刈り敷き廬せりとは（巻九・一六七七）

妻のいる大和へ聞こえていってくれないかなあ。大我野の竹の葉を刈り敷いて、私はわびしい仮寝をしていると。



妹山・背山

我妹子に我が恋ひ行けばともしくも並び居るかも妹と背の山（巻七・一二一〇）

都に残してきたあの娘のことを恋しく思いながら、紀伊路を歩いていくと、うらやましくも仲むつまじく並んでいることよ、この妹と背の山は。

加太

藻刈り舟沖漕ぎ来らし妹が島形見の浦に鶴翔る見ゆ（巻七・一一九九）

藻を刈る舟が沖からこちらへ漕いで来るらしい。妹が島の形見の浦に鶴の飛んでいるのが見える。

参考文献：『流域の歴史・道・人～紀の川～』（発行：和歌山県文化遺産活用活性化委員会）
取材協力：長谷正紀氏・NPO法人市民の力わかやま　イラスト：芝田浩子

梧陵の偉大な足跡をたどる

濱口梧陵。広川町に住む人でその名を知らない人はいない。1854年、安政地震が起こり、大津波が広村を襲った。その際に稲わらに火をつけ、村人を高台に導き、多くの人々を津波から守った。後進の教育のために私塾を作り、津波からの復興のため、私財を投げうち広村堤防を作った。そんな梧陵の偉大な足跡をたどる散策コースだ。

最初の目的地、**濱口梧陵墓**を目指し、**広川ビーチ駅**を出発する。途中、左手の貯水池には鴨が泳ぎ、ほのぼのとさせてくれる光景だ。何度か坂を越えて、道沿いにある看板に従って進むと、広川町が誇る偉人、濱口梧陵が眠る墓に到着する。

更に道を進み、橋を渡ると耐久中学校のグラウンドが見える。校内には、同校の前進にあたる**耐久舎**が当時のままの姿で残る。また、校庭には**濱口梧陵の銅像**があり、その隣には「稲むらの火」の物語が描かれた看板がある。濱口梧陵の判断力と人徳、そして津波の恐ろしさが伝わる物語だ。

耐久中学校を出ると、梧陵が築いた**広村堤防**が目の前に広がる。日差しを遮ってくれるまでに成長した松の防風林が並び、その向こうには美しい海が見える。

堤防は途中で「赤門」と呼ばれる鉄扉で一度切れる。この扉は、津波発生時には閉じられ、津波を防ぐ働きをするという。門の傍には**感恩碑**があるが、ここは毎年11月に全国でも珍しい津浪祭が開催されている場所でもある。

道をさらに進むと、町役場の前に**稲むらの火広場**があり、たいまつを持って走る姿の梧陵の銅像が迎えてくれる。

堤防沿いに来た道を引き返し、赤門前の道を入って、さらに右に折れると、歴史を感じさせる情緒ある町並みの道が続く。右手に赤煉瓦の壁が見え始めると**東濱口公園**だ。ここは、美しい日本庭園である。

公園を出て、次に**稲むらの火の館**へ向かう。ここでは、津波の恐ろしさや防災に学ぶことができる。併設された濱口梧陵記念館に立ち寄れば、梧陵の生涯や人となりについても知ることができる。

施設を出て、広小学校の前を通り、看板の通りに進むと、本日の最終目的地である**広八幡神社**がある。当時、稲むらの火に誘導され、村人がここに避難したことを思うと感慨深い。今でも地域の避難所となっており、平成25年（2013）には鉄骨2階建ての一時避難施設が完成している。そして、駅へと帰途についた。

広川町は海が非常に近くにあることから、津波の脅威にさらされ続けた町だ。道沿いには避難道の誘導表示も多く、津浪祭などを開催するなど、津波の恐ろしさを風化させない取り組みが続けられている。そんな雰囲気を感じながらの散策は、防災について今一度考える機会となるに違いない。

※稲むら（稲叢）とは積み重ねられた稲の束のこと。

①広川ビーチ駅
喫茶店と物産センターがあり、センターでは季節の野菜や花が販売されている。

②濱口梧陵墓
濱口梧陵の墓。大木に守られ、濱口家の墓と梧陵の墓が鎮座している。

③耐久舎(旧　耐久社)
今の耐久中学、高校の前身。梧陵が仲間とともに後進の育成のために設立した私塾。当時は剣術や漢学を教える場であった。

⑥感恩碑
濱口梧陵の数々の功績をたたえ、感謝するために昭和８年(1933)に建てられた石碑。

⑦稲むらの火広場
津波が襲った時、梧陵がたいまつを持って避難誘導に走る様子が再現されている。近くにはグラウンドなどもある。冒頭の梧陵像もここにある。

⑨稲むらの火の館
中には防災体験室や3D 津波映像シアターや津波シミュレーション、津波ライブラリーなどがあり、津波や防災について学ぶことが出来る。また、併設された濱口梧陵記念館では、濱口梧陵の生涯を感じることができる。

④濱口梧陵銅像
広川町の発展や復興に大きく寄与した濱口梧陵。彼の目は今何を見ているのだろうか。

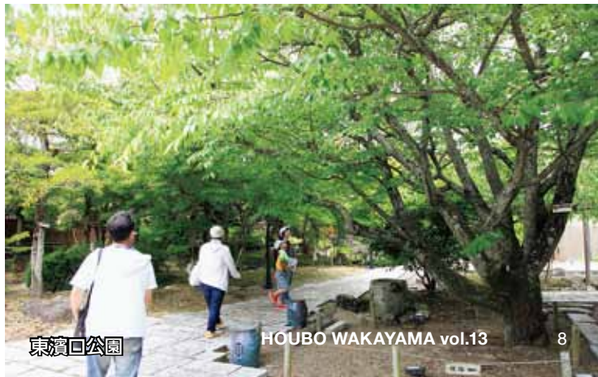
⑤広村堤防
安政の大津波の後、梧陵が広村の復興、津波で失業した人々を雇用するため、私財を投じ、およそ４年をかけて作り上げた堤防。
対面の石堤にはたいまつの炎をたよりに津波から避難する村人の様子が描かれている。

⑩広八幡神社
安政地震の際、濱口梧陵が稲わらの火を目印とさせて逃げ遅れた村人を避難させた、美しい神社。濱口梧陵碑もここにある。現在入り口付近にはイナムラ・ツナミ・タワーという風車・ソーラー発電の施設があり、震度５以上の地震発生時にライトとサイレン、アナウンスで避難を知らせる。

⑧東濱口公園
西濱口家である梧陵とともに、復興に尽力した東濱口家の敷地の一部を解放した庭園。いろはもみじややまざくら等々、非常に美しい風情を見せる日本庭園である。津波の高さを示した、安政の津波跡というモニュメントがある。

広村堤防

広八幡神社


東濱口公園

小銀河

白蝋の滝

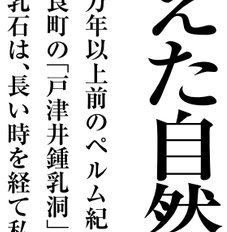
大亀岩

戸津井

時を越えた自然の営み

戸津井鍾乳洞

2億5千万年以上前のペルム紀の石灰石でできた鍾乳洞が和歌山県内でただ1ヵ所ある。それが由良町の「戸津井鍾乳洞」だ。総延長100mと規模は小さいが、ほの暗い光に浮かび上がる鍾乳石は、長い時を経て私たちに古代の息吹きを感じさせてくれる。


飛燕

地元の人たちの熱意で鍾乳洞開発へ

戸津井鍾乳洞は、大正から昭和20年ごろまで石灰石採石場だった。当時から鍾乳石があることは知られていたが、採石事業の終了とともに閉鎖された。

その後、地元で鍾乳洞開発の声が上がり、昭和55年（1980）から洞内の調査・開発が行われ、平成元年（1989）7月に一般公開がオープンした。当時は1万人の見学者が訪れたという。

洞内は年間の平均気温が約15度で夏は涼しく、冬は暖かい。特に夏は避暑として快適な空間だ。

地下に広がる神秘的な空間

地下へ足を進めると、さまざまな形の鍾乳石に出会う。亀の形をした「大亀岩」、龍が天に昇っているように見える「昇り龍」など、鍾乳石の形に合わせてネーミングされており、想像力を働かせると色々なものに見えてくる。

県登録の観光ガイド〝紀州語り部〟で、ゆら語り部クラブ代表の大野治氏によると、「開発の調査・探査をした当時に、調査員みんなで名前を付けていった」という。自身も鳥の形をした鍾乳石に「飛燕」と名付けたそうだ。

貴重な自然の営みを大切に

一番の見どころの「白蝋の滝」は、数cmほどの鍾乳石が無数に下向きにぶらさがっている、とても不思議な光景である。

わずか1cmの鍾乳石ができるのに約100年かかり、水が多いほどその成長は早まるそうだ。

今も止むことなく続く自然の営みが、これからも大切に守られていくことを願うと同時に、より多くの人に自然の造形美を観ていただきたい気持ちに駆られる鍾乳洞だ。

戸津井鍾乳洞
〒649-1134
和歌山県日高郡由良町戸津井646
［お問い合せ］ TEL0738-66-0406
9:00～17:00 土・日・祝祭日のみ
春・夏・冬休みは毎日公開（12/31,1/1休み）
大人 200円　小人 100円

料金受取人払郵便

和歌山中央局
承　認
258

差出有効期限
平成28年3月
31日まで

郵便はがき

640-8790

和歌山市市小路153－1
紀の川ビル2F

株式会社 ウイング
「ほうぼわかやまクイズ
&プレゼント」係

ふりがな				
お名前				
年齢　歳	性別 男 女	ご職業		
ご住所	〒			
クイズの答え	1 ・ 2 ・ 3	※あてはまるものを1つお選びください。		
本誌の入手場所				

※応募くださいました個人情報は、プレゼントの発送及び弊社からのお知らせ以外には使用しません。

vol.2

想いを カタチに

みんなに伝えたい、誰かに知ってもらいたい。胸に秘めた想いは誰にでもあるもの。
そんな思いをカタチにするのが本づくりです。
あなたのそばにいる和歌山の人が書いた和歌山の本、その1文字1文字に込められた想いを紹介します。

70年の歩み俳句に託す

句集『ななくさ』　坂本康雄さん

「軒下に干し大根が見えている」。坂本康雄さんが初めて俳句を作ったのは、小学校6年生の時だった。以来70年以上に渡って俳句を作り続けてきた坂本さん。記録している5000句以上のなかから561句を選び、句集『ななくさ』を自費出版した。「駄作の域を出ない」と謙遜する坂本さんだが、その一句一句には、俳句とともに歩んだ70年分の「想い」が込められている。

『ななくさ』という表題は、昭和が閉じた「ななくさ」の日から採りました。昭和初頭に生まれ、激動の昭和期を歩んできた身にとって、この日は特別な思い入れのある日なんです。初めて俳句を作ったのは小学校6年生の時ですが、特に熱心に作るようになったのは戦後、社会人になってから。戦時中は俳句どころではありませんでしたしね。

私は和歌山市で生まれ、縁あって東京や大津、現在の有田と、いろんな地域で過ごしてきました。私の気に入っている句のひとつに「月ヶ出といふ湖辺なる崖青葉」という句がありますが、これは大津時代に作ったもので、思い出の句です。有田市には昭和31年(1956)から暮らしています。もう60年近くになるんですね。子どものころ、有田の親戚の家で夏休みを過ごすことがあったので、移り住む前からこの町には良い印象を持っていました。自然が豊かで、人の優しい町だと。

坂本康雄 氏

B 6判／203頁
著者が生活する有田市や和歌山県内で作った句をはじめとする561句を収録した句集。

田舎になればなるほど人間関係が密になると言いますが、有田は本当に人情味のある温かい田舎町です。昔ながらの自然に親しむことができるのも、この町の大きな魅力のひとつでしょう。

有田に限らず、和歌山には俳句を作りたくなるような美しい風景や人間らしい営みの残っている場所が多いと思います。所属している俳句結社のメンバーとは県内各地に吟行しました。句集には、和歌の浦や根来寺、白浜などで作った句を選んでいます。

『ななくさ』では、561句を新年、春、夏、秋、冬と季節ごとに区分し、年代順に並べました。有田をはじめとした和歌山の四季折々の風情を感じていただければうれしいですね。

私の句は駄作の域を出ないと思いますが、それでもこうして句集を残すことができました。和歌山にはたくさんの「俳人」たちがいます。そういう人たちにもぜひ「想い」がかたちに残る喜びを知ってもらいたいと思っています。

和歌山県内をはじめ、全国各地を旅した坂本さん。各地の風物を見つめる優しい句や、自作の俳画で彩られた句集を手に語るその表情からは、句集に込めた人生の深みが伝わってきた。

I ♥ WAKAYAMA 私の和歌山

マイブーム「御朱印集め」

by ruka（編集部）

最近は寺社めぐりもパワースポットといわれ、若い人も多く行くようになりました。

そのブームの一つに「御朱印」を集めるというのがあります。私も2年前に、京都の晴明神社で御朱印帳を手にいれてから集めるようになりました。

旅の記念に買った御朱印帳だったのですが、集めるうちに段々はまって、旅行や寺社がありそうなところへ行くときは必ず持っていくようになりました。

御朱印は神社やお寺に参拝した印として頂くことができるものですが、もとは写経をしたものをお寺に収めてその印としてもらった「納経印」がはじまりです。江戸時代に庶民も寺にお参りするようになって、そのうち参拝するだけでもらえるようになり、その習慣が神社にも広まりました。

集めた中で一番のお気に入りは、かつらぎ町天野の丹生都比売神社です。神社の御朱印は中央に神社名が入るのですが、長い名前なのにバランスよくページに収まり、とても品格のある美しい御朱印だと思います（神社のイメージにピッタリ！）。また、田辺の闘鶏神社は、絵柄に2羽の鶏が入るなど、神社の由来につながる絵柄になっているところが面白いと思います。

御朱印はお守りのようにご利益を求めるものではありませんが、神聖なもので大切に持って、最後は自分の棺に一緒に入れるそうです（これは最近知りました）。

世界遺産である高野山と熊野三山の御朱印は、八咫烏の絵柄がそれぞれの神社で違うと聞きますので、とても楽しみにしています。

高野山開創1200年を迎える来年をめざして、ぜひぜひ手に入れたいと思っています!!

編集後記

こんにちは♪　ほうぼわかやま編集長の岡京子です。今号も手に取って頂きありがとうございます。

さて、ほうぼわかやま編集部員はウイングの社員さんと社外の有志（私も含め）で構成されています。みなさん、和歌山が大好きな方々ばかりです。

毎号、編集会議でそれぞれのテーマ、ページ担当者を決めて、取材・執筆にかかります。今回は、南紀熊野ジオパーク構想、南海道、広川町散策、戸津井鍾乳洞、御朱印帳等をテーマにしましたが、それぞれのページの取材にはこぼれ話がつきものです。それらを持ち寄って編集会議で披露し合うのも、なかなか楽しいひとときです。残念ながら誌面では紹介できないネタが多いですが、実は記事にも引けを取らないくらい興味深いお話ばかりです（笑）。

特に今号で私が大笑いさせて頂いたのは、ジオパークの記事の写真撮影の秘話です。撮影班は、どれだけ真剣に、体を張って（笑）これら写真を撮ったのか…。その武勇伝ときたら、驚きです（笑）。写真からも伝わってきませんでしょうか？　そんな裏話も読者のみなさんにご紹介できる機会があれば…と常々、思っている次第です。　　第13号編集長　岡　京子

facebook はじめました。
http://www.facebook.com/houbo.wing
「いいね」を押すと、ほうぼわかやまの最新情報があなたのタイムラインに届きます！
クリック！ いいね！ ほうぼわかやま 検索

株式会社ウイング
印刷から、新しい価値の創造を。

株式会社ウイング／印刷物の企画・デザイン・製造を専門とする会社で、「ほうぼわかやま」の発行や本づくりを通じ、文字による地域文化の振興を目指しています。自費出版のご相談はウイングまで！
［沿革］創業 1972 年。設立 1981 年。

「ほうぼわかやま」発行について

和歌山の歴史・文化を掘り起こし郷土愛を育む一助になればと、弊社が自費で2008 年から年 2 回発行している情報誌です。また、この活動を通して、郷土と社内の活性化の両立を図ることを目的としています。

ほうぼわかやまのバックナンバーは弊社ホームページからもダウンロードできます。
詳しくはウェブで検索→ http://w-i-n-g.jp　ウイング 和歌山　検索
お問い合わせ先 0120-136-700

クイズにお答え頂いた方の中から抽選で「御朱印帳」を
合計6名様にプレゼント!!　※お色は選べませんので、あらかじめご了承下さい。

問題　和歌山にあった古代の官道はなんでしょう？

ヒント　本号のどこかに答えが載っています

①東海道　②南海道　③北海道

Vol.12の答えは『②きいちゃん』でした。

応募方法

このハガキの各項目をご記入後、切り取って投函（切手は不要です）
もしくはメールにてご応募ください。 houbo@w-i-n-g.jp

1次〆切 2014年9月末日（当選人数：3名様）
2次〆切 2014年10月末日（当選人数：3名様）

本誌へのご意見・ご感想

ご協力ありがとうございました。

2014年8月1日　発行人／松田好司　編集人／岡京子　発行／株式会社ウイング
本社　〒640-8411 和歌山県和歌山市梅取172　TEL.073-453-5700／FAX.073-453-5522
E-mail：mail@w-i-n-g.jp　http://w-i-n-g.jp